タイの日本語教育における助詞「ネ」の伝達機能の指導上の問題点

アサダーユット　チューシー

要　旨

本稿では、タイの日本語教育の実情を報告し、助詞「ネ」の学習の問題についての改善案を提言する。チューシー（2008）の助詞「ネ」の「伝達機能」の分類を用い、タイ国内で使用される初・中級の日本語教科書を調べた結果、文法解説に「同意要求」、「確認」の「ネ」の用法ではない例が多く出現していることが確認され、中級教材の映画シナリオと、初・中級教科書に出現している助詞「ネ」の用例を比較し、初級教科書には、「1. 注視要求」の用例が多いことから、初級教科書に解説を加えること、「6. 自己確認表示」や間投助詞の用例は少ないため、初級では扱わず、用例と文法解説を中級教科書に移すよう提案する。また、タイ人学習者の会話データを用いて「ネ」の使用状況を確認したところ、日本への留学未経験者より留学経験者の方が、誤用も多数ありながら、初級教科書にない助詞「ネ」を多用しており、未経験者は助詞「ネ」の機能が教科書で紹介された用法のみに限られていることが分かった。このことから、初級と中級の間で、全ての助詞「ネ」の伝達機能の明確な解説を記すべきであるとの提言を行う。

キーワード

助詞「ネ」・伝達機能・タイの日本語教育・教科書・映画シナリオ

1. はじめに

本稿では、タイをケース・スタディーとして海外で行われている初・中級日本語教育における助詞「ネ」の指導の問題について明らかにして、学習項目の改善を提言したい。

助詞「ネ」は、会話で多く使用されているため、学習者が助詞「ネ」を適切に使用できれば、会話を円滑に進めることができると考えられる。しかし、初級段階では、学習者は次々に文型を学習するため、助詞「ネ」のような終助詞は、一つの課で全ての機能を指導することはできず、初級の最初の段階から、様々な会話例とともに、新しい機能をもった「ネ」が現れるという状況にある。

タイでは、高等学校から日本語を学習することが多く、その中で、教科書としては、日本で出版されている『みんなの日本語』シリーズと、国際交流基金の『教科書を作ろう』に基づいて、タイの日本語教師によって作成された『あきこと友だち』シリーズが最も多

く使用されている。大学入試の日本語の試験を受けるために、この2冊の教科書は基本となる[1)]。本稿では、まず、この二冊を分析の対象とする。また、中級段階では、教師の自作教材や映像教材が使用されているが、本稿では、タイ人向けに作成された、教師の自作教科書の『ホップ・ステップ・ジャンプ』を分析する。

本稿は、これらの教科書の分析を通じて、海外における助詞「ネ」の指導上の問題の特徴を明確にし、さらに初級の学習を経たタイ人学習者の会話を分析し、教科書による指導上の問題を検証しながら、助詞「ネ」の指導に関する他の問題についても分析を行う。本稿では、これらの分析を踏まえて、初級から中級にかけて、どのように助詞「ネ」の学習項目を整理すべきか、現状の教科書にどのように改善すべきか、提案する。

なお、本稿では、タイにおける日本語教育の初級を、中等教育で学習する日本語（3年間）のレベル、中級は、高等教育で学習するレベル（最初の2年間）として定義する。

2. 助詞「ネ」の「伝達機能」

2.1　助詞「ネ」の機能に関する先行研究

助詞「ネ」の機能・用法を述べる先行研究は多数あるが、現代日本語教育で一般に使用されている、コミュニケーション上の機能を分析観点とした助詞「ネ」の先行研究を中心に取り上げたい。まず、大曽（1986）、伊豆原（1992）、野田（2002）等は、助詞「ネ」に「同意要求」、「同意表示」、「確認要求」という3機能があるとしている。さらに、伊豆原（1992）では、話し手のみが情報を所有する場合に用いられる「ネ」の「聞き手を話題に引き込む」機能が挙げられている。また、野田（2002）は、コミュニケーションの観点の外に、「談話管理理論」（田窪・金水1998）による「拒絶表明」、「自己確認」や独自の「行動宣言」、「回想」の用法を挙げている。

一方、文法参考書においても、同様の記述がみられる場合がある。例えば、庵他（2000）では、助詞「ネ」の機能として、「同意を求める」（以下の（1）A）、「同意を表す」（以下の（1）B）、「確認を求める」（以下の（2）A）という三つの機能が記述されている。

（1）A：あの二人、お似合いだね。　B：ええ、本当にいいカップルね。

（2）A：会議は10時からですね。　B：ええ、そうです。　（庵他：164）

さらに、伊豆原（1992）の「聞き手を話題に引き込む」機能と同種の以下の例（3）、野田（2002）の「自己確認」と同種の以下の例（4）も「もう少し」[2)]の欄に取り上げており、このような「ネ」は必須ではないと述べている。

（3）A：昨日歌舞伎を見たんですよ。いやあ、すごく感動しましたね。

（4）A：締め切りまで何日ありますか。　B：えーと、後2週間ですね。　（庵他：165）

また、この「もう少し」の欄には、差し迫った状況以外の依頼・勧誘（「～テクダサイネ」、「～マショウネ」）や「～ナサイネ」の命令の文にも出現し、親密でやわらかい表現にする効果があると言及している。ただし、このような文に出現している「ネ」がコミュニケーションの観点でどのような態度を聞き手に伝えようとしているのかということは述べられていない。

以上のように、これまでの先行研究では、「同意要求」、「同意表示」、「確認要求」の三

つの機能については、ある程度の共通理解が見られるものの、その他の機能については、異同が見られた。また、全ての「ネ」の機能を網羅的、統一的に捉えているものが、これまでの先行研究にはない。

こうした先行研究の現状を踏まえ、チューシー（2008）は、先行研究が助詞「ネ」のコミュニケーション上の機能を統一的に捉えていない問題や、「同意」の概念の範囲の曖昧さなどの問題を取り上げ、ザトラウスキー（1993）の「発話機能」の概念を参考にして、コミュニケーションにおける話し手の聞き手に対する「働きかけ」を基準として、独話資料における助詞「ネ」の「伝達機能」を6種に分類している。チューシー（2008）は、助詞「ネ」の「伝達機能」を、「1. 注視要求」、「2. 同意要求」、「3. 確認要求」、「4. 注視表示」、「5. 同意表示」、「6. 自己確認表示」という6種類に分類し、独話においては「3. 確認要求」と「5. 同意表示」が出現していないと述べている。現状では、このチューシー（2008）の分類が、最も網羅的、統一的に助詞「ネ」の機能を捉えていると考えられるため、本稿では、チューシー（2008）の分類を用いて、分析を試みる。

2.2 助詞「ネ」の「伝達機能」とその出現傾向

まず、以下に、例とともに、チューシー（2008）の助詞「ネ」の6種類の分類を挙げる。

「1. 注視要求」

情報所有者である話し手が、聞き手に対して話し手と同じ情報の認識を求める機能である。以下の例（5）は、話し手のみが分かる情報を表示するものである。「注視要求」の対象としては、一般的な情報の外に、話し手の意志・願望、聞き手に対する話し手の評価、話し手の行為要求なども含まれる。また、間投助詞「ネ」も、未完成情報である文節に「注視要求」すると見なされるため、この類に相当するものと考える。

（5）三輪　どうしてダンスを始められたのか分かりませんが、奥さんに内緒になさっているというのは単にはずかしいからでしょう。
　　昌子　それも経験？
　　三輪　男としてのね。それとたぶんもうそろそろダンスをやめるかもしれませんね。
（『Shall We ダンス？』）

「2. 同意要求」

話し手と聞き手が同じ情報を共有して、それに対する聞き手の賛意を求める機能である。以下の例（6）、（7）のように、文の内容は何等かの事象に対する評価で、相手に返答を求めるものである。

（6）｛踊っている杉山と豊子を見ている平山と三輪｝
　　平山　なかなかやりますね。
　　三輪　だろ。（『Shall We ダンス？』）

（7）審査員　　おタマちゃん、鐘二つですね。
　　審査員長　ですね。（『のど自慢』）

「3. 確認要求」

話し手がある程度情報を所有しているが、より多くの情報を所有する聞き手に情報を求める際に使用される機能である。野田（2002）で述べられているように、「確認要求」の

助詞「ネ」は、聞き手の方が情報をより多く所有している状況で、話し手がその情報を得るために使用するものである。この「確認要求」の「ネ」の後には、例（8）のように、「確認要求」の「ネ」に対する返答文が必要となる。

（8）磯村　｛笛で合図をしてイルカがジャンプする｝
　　鈴木　今のでイルカが飛ぶんですね？
　　磯村　そんな訳ないだろ、何言ってんだ。　（『ウォーター・ボーイズ』）

「4. 注視表示」

話し手が聞き手から未知の情報を受け取ったり、話し手自身の疑問を示したりする際に、情報を受け取ったことや、疑問に対する注視をして、回答を考え始めたということを表示する機能である。例（9）のような前文を反復して話を受け取る「ンデスネ」、話し手自身が考える際の「ソウデスネ」は、「注視表示」とする。

（9）磯村　どうすか、シンクロのできは。
　　杉田　さあ。どうなんでしょうね。分かりません。　（『ウォーター・ボーイズ』）

「5. 同意表示」

話し手と聞き手が同じ情報を共有して、賛意を求められてから、賛意を表示する機能である。基本的には、例（7）の審査員長の「デスネ」のように、前文の「同意要求」の「ネ」に対して返答する「ソウデスネ」という表現で現れるのが多いが、以下の例（10）のように、試験官が評価した内容に対して返答するものもこの種類である。

（10）試験官　あ、そば屋ならそこまずいけど、うまいとこあるよ。
　　圭介　　そうですね。　（『のど自慢』）

「6. 自己確認表示」

ある話をする際に、話し手自身がよく考えていなかったことに関して、新たな情報が得られ、それを自分自身に確認したことを表示する機能である。以下の例（11）のように、相手から質問を受けて返答する際に自己確認が行われている。

（11）女性客Ａ　あのヘンテコな魚、なんて言うんですか。
　　鈴木　　あ、エレパントノーズですね。
　　女性客Ｂ　じゃああれは？　（『ウォーター・ボーイズ』）

本稿では、以上の６種の分類を用いたチューシー（2008）の独話資料における助詞「ネ」の機能の分析結果に、さらに、会話を多く含む資料を補う目的で、タイの大学で中級の日本語教材として使用されている５作の映画シナリオ（『ウォーター・ボーイズ』、『おもひでぽろぽろ』、『のど自慢』、『耳をすませば』、『Shall We ダンス？』）を追加し、機能を分

【表 1】　助詞「ネ」の「伝達機能」と出現傾向

教材＼機能		1. 注視要求	2. 同意要求	3. 確認要求	4. 注視表示	5. 同意表示	6. 自己確認表示	合計
1	独話資料[3]	1,954（89.84%）	2（0.09%）	0（0.00%）	140（6.44%）	0（0.00%）	18（0.83%）	2,175（100.00%）
2	映画シナリオ	289（66.28%）	66（15.14%）	14（3.21%）	52（11.93%）	3（0.69%）	12（2.75%）	436（100.00%）

類して、出現傾向の分析を行った。

【表 1】に示すように、映画シナリオでは、6 種類の助詞「ネ」が全部出現しているが、独話資料と同様に、最も多く使用されている「ネ」の機能は、「1. 注視要求」(66.28%) である。また、独話資料で出現数が少なかった「2. 同意要求」は、映画シナリオに 15.14%も出現している。3 位の「4. 注視表示」(11.93%) はどの映画資料にも比較的多い。本稿では、以後、【表 1】の出現傾向を教科書及び会話データと比較しつつ、分析を試みる。

3. タイ国内で使用される初・中級日本語教科書の分析

3.1 教科書における助詞「ネ」の文法解説の問題点

本節は、タイの日本語教育における指導上の問題を明らかにするために、まず、タイの日本語教育の初級レベルにおいて標準的に用いられている初級日本語『あきこと友だち』と『みんなの日本語』及び中級レベルの教科書の『ホップ・ステップ・ジャンプ』の分析を行った。『あきこと友だち』(6 冊) と『みんなの日本語』(2 冊) では、助詞「ネ」の文法説明が前半に記されている。助詞「ネ」の記述は、どちらの教科書も「同意要求」、「確認」の用法にとどまる。

(12)「ネ」は文末に付ける助詞である。この課で、以下のような意味と用法がある。

11.1 会話の参与者が同意するだろうと仮定する際用いる。例えば、

わあ、きれいな店ですね。　　いろいろなネクタイがありますね。

ああ、いい色ですね。

11.2 確認をする際に用いる。例えば、

客：ハンバーガーを一つとチーズバーガーを二つとコーラを三つください。

店員：ハンバーガーを一つとチーズバーガーを二つとコーラを三つですね。

(『あきこと友だち 2』第 7 課：70-71、筆者訳、下線追加)

(13)「ね」is attached to the end of a sentence to add feeling to what the speaker says. It shows the speaker's sympathy or the speaker's expectation that the listener will agree. In the latter usage, it is often used to confirm something.

(『みんなの日本語 I　文法解説』第 4 課：35)

また、『あきこと友だち』と『みんなの日本語』では、助詞「ネ」が付く表現が「語彙」と「表現」の項目でも取り上げられている。助詞「ネ」が含まれている表現を【表 2】と【表 3】にまとめた。

中級教科書の『ホップ・ステップ・ジャンプ』には、「ネ」と「ヨネ」との違いの解説があるが、間投助詞「ネ」などの新しい「ネ」の用法が出現しているにもかかわらず、助詞「ネ」の解説が追加されていない。つまり、(12) と (13) の解説及び「ネ」が現れる表現の意味説明以外には、中級教科書の終わりまで、助詞「ネ」の解説が一切ないことになる。(12)、(13) の説明で、全ての助詞「ネ」の機能を説明できれば問題はないが、実際はそうではない。

次に、これらの教科書における「ネ」についての解説を文法参考書、先行研究、チューシー (2008) と比較すると、教科書で解説されている「確認」(例 (12) の 11.2) は、先

【表２】『あきこと友だち』の助詞「ネ」が付いている表現の説明

番	課	表　現	表現説明
1	8	いいですね。	会話の参与者が発言したことに賛成する表現
2	8	そうですね。	会話の参与者に同意の感情を表す表現
3	14	そうですね。	タイ語の“ɯ:m”。「ね」の音を少し長く伸ばして、考え中、あるいは言葉の検索中の時に用いる表現。

（表現説明は筆者による和訳）

【表３】『みんなの日本語』の助詞「ネ」が付いている表現の説明

番	課	表　現	表現説明
1	4	大変ですね。	That’s tough, isn’t it?
2	6	いいですね。	That’s good.
3	7	このスプーン、すてきですね。	What a nice.
4	8	そうですね。	Well, let me see.
5	9	残念ですね。	That’s a pity.
6	30	それはいいですね。	That’s good idea./ That sounds nice.
7	32	それはいけませんね。	That’s too bad.
8	37	よかったですね。	That’s lucky, isn’t it?
9	48	いいことですね。	That’s good.

行研究、文法参考書（例（2））、チューシー（2008）（例（8））の「確認要求」とは異なる振る舞いをする。教科書における「確認」は、相手の言葉を反復して確認しているが、確認に対する相手の応答が必要ではないという特徴があるため、「確認要求」として捉えにくいと思われる。

また、【表１】の資料における出現傾向と教科書での解説を比較してみると、独話資料でも、映画シナリオでも、話し手のみが所有している情報に共起する「1. 注視要求」の「ネ」が多く出現しているのに対して、この３冊の教科書では、「1. 注視要求」の解説がないということがわかる。2.1 節で取り上げた文法参考書である庵他（2000）の解説では、「2. 同意要求」、「3. 確認要求」の「ネ」は必須の「ネ」とされている一方、「1. 注視要求」の「ネ」は必須の「ネ」ではないとされているが、資料及び教科書での出現傾向から考えると、「1. 注視要求」も初級教科書に解説があるべきだと思われる。

出現傾向との比較によって、もう一つ明らかになる問題として、働きかけのない「ネ」が解説されていないということがある。２冊の初級教科書は、働きかけのない「ネ」を、【表２】、【表３】にもあるように、表現としては、指導している。さらに、『みんなの日本語』の場合は、同意を要求する「ネ」に対して、「ええ。」という文型を「同意表示」として導入しているため、「そうですね」は、話を考える際の「4. 注視表示」として理解させよう

としているように思われる。【表 1】の助詞「ネ」の、「5. 同意表示」、「6. 自己確認表示」の 3 つの「表示系」の「伝達機能」の出現傾向が決して少なくないということからいえば、これらの機能が解説されないことは大きな問題なのではないかと思われる。

教科書における助詞「ネ」についての解説がこの程度しかなければ、学習者も、「ネ」は「同意要求」と「確認」に相当するものと捉えてしまって、「ネ」の他の機能を理解できなくなり、「同意要求」や「確認」の範囲はどこまで適用できるのかということが分からなくなる[4)]。また、「確認」は「確認要求」と同じものだと勘違いし、助詞「ネ」の機能は相手に働きかけをするものだけだと誤解してしまう恐れもあると思われる。

3.2 初・中級教科書における助詞「ネ」の用例と問題点

3.1 で検討した初・中級教科書の本文、練習問題などの全ての用例を調べ、助詞「ネ」の「伝達機能」及び共起する文（共起文）の内容の特徴を分析したところ、【表 4】のような結果となった。次に、この結果をもとに、教科書の用例の問題点を分析する。

【表 4】 初・中級教科書における助詞「ネ」の伝達機能と共起文の内容

	「ネ」の伝達機能 及び共起文の内容	用　例	初級		中級
			みんな	あきこ	ホップ
1. 注視要求			103 52.29%	44 50.00%	29 48.33%
[1]	評価の文 1（相手の領域に属するものの評価）	素敵なかばんですね。／ ありがとうございます。	49 24.87%	8 9.09%	9 15.00%
[2]	意志・願望文	今日は日本料理が食べたいですね。 CD も新しいのを買ってかえしますね。	5 2.54%	3 3.41%	3 5.00%
[3]	行為要求の文	よく休んでくださいね。	2 1.02%	3 3.41%	0 0.00%
[4]	理由表示の文	海の上なら、騒音の問題がありませんからね。	1 0.51%	0 0.00%	0 0.00%
[5]	逆接の文	あまり売れませんでしたけどね。	1 0.51%	0 0.00%	3 5.00%
[6]	情報表示の文 1(話し手が所有する情報)	のどが渇きましたね。	45 22.84%	30 34.09%	9 15.00%
[7]	疑問の文	いつまで続くかしらねえ。	0 0.00%	0 0.00%	1 1.67%
[8]	未完成の文節	娘がね、今年受験なんでね、今勉強しているんです。	0 0.00%	0 0.00%	4 6.66%
2. 同意要求			27 13.71%	14 15.91%	2 3.33%
[9]	評価の文 2（両者の領域に属するものの評価）	今度の課長、まじめそうですね。／ でも、服のセンスはなさそうですね。	27 13.71%	14 15.91%	2 3.33%
3. 確認要求			1 0.51%	4 4.55%	4 6.66%
[10]	情報表示の文 2（聞き手の知識）	あきこさんは三ばん目ですね。／ はい。	1 0.51%	4 4.55%	4 6.66%
4. 注視表示			51 25.89%	19 21.59%	18 30.00%
[11]	納得の文	そうですか。ずいぶん古いんですね。	11 5.58%	3 3.41%	2 3.33%
[12]	前文の反復文	350 円です。／ 350 円ですね。ありがとうございました。	9 4.57%	5 5.68%	4 6.66%
[13]	外的な文脈の反復文	これ、速達でお願いします。／ はい、オーストラリアですね。370 円です。	2 1.02%	2 2.27%	1 1.67%
[14]	前文の返答文	上着のボタンがとれそうですよ。／ あっ、ほんとうですね。	5 2.54%	4 4.55%	6 10.00%
[15]	前文の受容文	バンドン？ どんな所ですか。／ そうですね。緑が多くて、きれいな所です。	24 12.18%	5 5.68%	5 8.33%
5. 同意表示			14 7.11%	2 2.28%	4 6.66%
[16]	ネが付く前文等の返答文	最近の学生はよく遊びますね。／ そうですね。	5 2.54%	1 1.14%	2 3.33%
[17]	勧誘の受諾文	いっしょにいかがですか。／ いいですね。	9 4.57%	1 1.14%	2 3.33%
6. 自己確認表示			1 0.51%	5 5.68%	3 5.00%
[18]	情報返答の文	友達が会社に入ったとき、日本人はどんな物をあげますか。／ ネクタイやかばんなどですね。	1 0.51%	5 5.68%	3 5.00%
合　計			197 100.00%	88 100.00%	60 100.00%

【表４】の例文は、教科書で解説された典型的な「同意要求」と「確認」に該当するもの、該当しないもの、どちらともいえないものという３つのグループに分けられる。

典型的な「同意要求」に該当するのは、例［9］で、「確認」に該当するのは例［12］、［13］のみである。例［10］は、庵他（2000）にも見られた助詞「ネ」の典型的な「確認要求」であると考えられるが、例［9］とは機能が異なるため、例［10］のような例をまず「確認要求」の例に取り上げるべきであろう。

教科書の解説に該当しないものとしては、「1. 注視要求」の例［2］、［4］、［5］、［6］、［7］、［8］、「6. 自己確認表示」の例［18］がある。これらの文の内容は、話し手のみが所有する「意志・願望」、「理由」、「知識」、「疑問」、「未完成情報」で、「同意」や「確認」ができる内容ではない。また、働きかけのない「表示系」の「ネ」の例［15］考える際の「そうですね」、［17］勧誘の返答の「いいですね」と、例［16］同意の「そうですね」も表現としては取り上げられているが、教科書で解説されている機能には該当しない。

また、「同意要求」と「確認」という機能の範囲に概念としての曖昧さがあることにより、典型的な「同意要求」や「確認」に該当するかしないかどちらともいえない例も見られた。強いて分類すれば、「同意要求」の解説に近いものは例［1］、［3］であり、「確認」に近いものは、例［11］である[5)]。これらの用例は、全用例数の 15 ～ 30％に見られる。

教科書の助詞「ネ」の用例を調査した結果、教科書の解説に該当しない助詞「ネ」の機能が多種であるのみならず、【表４】の各文の内容の出現率を確認すると、初級教科書では、解説に該当しない例文が、45 ～ 50％あり、中級教科書では 50％を上回ること分かり、教科書における解説が不十分なものであることが明らかになった。

4. 日本語教科書の解説の見直し

第３節から、教科書における解説が不十分なことと、出現している用例と合わせて記述を修正する必要があることが明らかになったが、どのような機能、どのような共起文の内容を優先すべきなのかを本節では、検討したい。

前節で述べたように、「2. 同意要求」や「3. 確認要求」の教科書における出現数は少ないが、述べ立て文を問いかけ文に変える働きをするため、他の伝達機能に比べて、最も表現意図の誤用を招きやすいものと考えられる。そのため、初級で、これを最初に取り上げることは良いことと思われる。ただし、先行研究や文法参考書が取り上げた「3. 確認要求」の例がどちらの教科書にも少ないため、「3. 確認要求」を学習するための例を教科書に増やすべきであろう。

次に、独話資料及び映画シナリオに、最も多く出現している「1. 注視要求」の「ネ」は、【表４】によれば、初級段階では、『みんなの日本語』（『みんな』）では相手を褒めるような評価の文の「ネ」が最も多いが、『あきこと友だち』（『あきこ』）では、話し手が所有する情報を表示する際の「ネ」が最も多い。教科書では、「ネ」がどのような文と共起するかについて、ほとんど説明がされていないが、このような共起文を中心として解説をすることは、有効であろう。学習者は「～テクダサイ」の文型から、疑問文「カネ」、「カシラネ」、間投助詞までを学ぶ間に、少しずつ「ネ」と共起する文を学習していくため、「ネ」

が出現する課でその都度、「1. 注視要求」の概念を確認していけば良いと思われる。そして、中級段階に入る前に、学習した「伝達機能」と共起文の特徴を整理すれば良いであろう。ただし、「1. 注視要求」の「ネ」の共起文のうち、例［4］と［5］のようなものは、『みんなの日本語』にも1例ずつしか出現しておらず、これらは、中級段階で指導される間投助詞「ネ」と共起する文節と似ているので、終助詞なのか間投助詞なのかが問題になるため、中級日本語に繰り下げ、間投助詞とともに解説を加えるべきだと思われる。その他の「ネ」と共起する文については、初級段階で、「1. 注視要求」の解説を明確にし、例を挙げるべきであろう。

また、働きかけがない「表示系」の「ネ」については、初級教科書、文法参考書では、「同意表示」を重視しているが、【表1】や【表4】から、「4. 注視表示」の方が賛意を表す「5. 同意表示」より出現数が多いため、初級の初期には、機能を指導せずに、表現として指導しても良いが、初級段階の終わりごろまでには、「4. 注視表示」として働く「ネ」をまとめて、説明する解説も必要であると考える。「6. 自己確認表示」の「ネ」は、初級の教科書では出現数が少なく、文法参考書でも、副次的なものとされているため、初級の教科書からは、例を除き、中級段階に繰り下げて、解説を加えるべきであろう。

5. 高等教育のタイ人学習者の会話データからみた助詞「ネ」の使用上の問題

以上、教科書における「ネ」の機能についての指導上の問題を述べたが、「ネ」を指導する際の問題は、学習者の学習環境にも原因がある。タイの中等教育で日本語を学ぶタイ人学習者は、日本で暮らしていないことと、学習科目が日本語だけではないという条件があるため、日本に留学したタイ人学習者が、生活できるように日本語のコミュニケーションを必死に学習しようとしているのとは、かなり異なる部分がある。タイ国内で学ぶ日本語学習者は、全体的に、会話能力が日本に留学した日本国内の学習者に比べてやや低いという実態がある。

しかし、その一方で、タイ国内で学ぶ学習者は、大学入学試験での日本語の成績を上げるため、高等学校で行われる日本語の授業のほかに、短期間の日本留学や、タイ国内の民間の日本語学校で日本人教師と会話能力を高める授業を受けることがあり、高等教育に進学する学習者の会話能力にはばらつきがある。

本稿では、次に、ここまでの分析に基づき、実際のタイの日本語学習者の会話を分析して、その問題点を探る。分析に当たっては、初級レベルを終了したチュラーロンコーン大学の1年生（3組6名）の友人同士の雑談をそれぞれ平均10分間録画し、被験者を日本留学の経験者と未経験者という2グループに分け、各学習者の助詞「ネ」の使用を分析した。

今回の被験者のなかで、AA、DA、SA、GAは日本留学の経験を有する学習者である。留学経験者には、母語話者をモニターし、学習者自身に固有の文法を作ってしまったと考えられる場合がある。例えば、被験者DAは、前節で中級段階に指導を繰り下げるべきとした「6. 自己確認表示」の「ネ」や間投助詞「ネ」も既に使用できている反面、「何だろう」、「何をしたかな」の代わりに、「何ですね」、「何をしますね」という誤用を犯していた。

【表5】　タイ人学習者の助詞「ネ」の使用回数（伝達機能別）

被験者＼機能		発話数	1. 注視要求	2. 同意要求	3. 確認要求	4. 注視表示	5. 同意表示	6. 自己確認表示	誤用	合計
1	AA（12）	128	2	2	1	0	0	0	0	5
2	DA（1）	131	9	6	0	2	0	1	4	22
3	SA（1）	123	14	0	0	3	2	0	1	20
4	GA（1）	106	1	1	2	1	2	0	1	8
5	SU（0）	97	1	0	1	1	0	0	0	3
6	BB（0）	111	0	0	0	0	0	0	0	0
合計			27	9	4	7	4	1	6	58

注　被験者の欄の（　）内の数字は、留学期間を月単位で表したもの。

また、以下の例（14）のように、被験者SAには、間投助詞の誤用も見られた。

（14）58SA　後はね↘、アニメが好き？

59GA　アニメ？

60SA　うん。アニメ。　（SAとGAの会話データ）

DAやSAの誤用は、おそらく、留学期間が少ないことや、「ネ」の用法を明確に整理して指導されてこなかったことに起因するものであろう。日本への留学を通じて、助詞「ネ」をある程度使いこなすことができるようになっても、「ネ」の使い分けについての指導が十分でなければ、かえって、学習者が誤用を多く犯してしまうおそれもある。日本語教師には、こうした誤用を適切に指摘し、学習者を指導する義務があるだろう。この例の場合は、間投助詞がどのような文、文節に出現できるのかという使用条件を整理させる必要があるのではないかと思われる。

このほかに、留学未経験者と比べ、留学経験者に特徴的な点としては、留学経験者が自分の情報を伝えながら、「1. 注視要求」の「ネ」を使用できるという点がある。例えば、DAは、例（15）のように、「日本語の勉強のきっかけ」の話をする際に、「1. 注視要求」を使用できるのに対して、留学経験のない学習者SUは、「がんばってね」という教科書から学んだ「～テクダサイネ」の「1. 注視要求」の「ネ」の1例のみしか使用していない。

（15）163DA　わたしは、日本、初めに、えと、高校、高校一年生から勉強しまし、え、勉強しましたね↗。

164DA　えと、初めに、日本の歌手が大好き。　（DAとSUの会話データ）

やはり留学経験のない学習者は、教科書のみ、しかも、限られた機能についてしか、助詞「ネ」に関して、指導を受けていないので、使用できる助詞「ネ」の種類が限られてしまう。例えば、例（16）のように、留学経験のない被験者SUには、「ネ」で同意を求められた際、教科書通りに「ハイ」、「エエ」としか答えられない場合が見られた。

（16）226DA　日本語がとーても難しいですね↘。

227SU　はい。わたしも日本語を、日本語が難しいと思います。

（DA と SU の会話データ）

また、「4. 注視表示」に関しては、今回の会話データの中に、自分が共有していない話を受け取る際、「そうですか」ではなく、「そうですね」を用いた誤用なども数例見られた。これなども、助詞「ネ」の指導の際に、留意点として取り上げるべきであると言えるだろう。

以上のように、初級レベルを終了したタイ人学習者の会話の分析結果から、学習者の助詞「ネ」の使用にばらつき、偏りがあることが分かった。教科書で指導された範囲でしか、「ネ」の使用ができない留学未経験の学習者はもちろん、「ネ」の使用がある程度できる留学経験のある学習者に対しても、学習者自身が妥当性を確認できる「ネ」の文法を整理するための指導が必要であろう。

6. おわりに

本稿では、まず、先行研究や文法参考書を踏まえ、整理されたチューシー（2008）の「伝達機能」で、独話資料及び映画シナリオと、教科書に出現している用例を比較し、初級教科書にも「1. 注視要求」の出現数が多いことを明らかにした。また、タイで使用される初・中級教科書の分析により、これらの教科書の解説で紹介された「同意要求」、「確認」の「ネ」の用法ではない例が本文、会話などの用例に多く出現していることを確認した。これらのことから、筆者は、初級の教科書に、助詞「ネ」に関して、必要な解説を加えるべきであるとした。「6. 自己確認表示」や間投助詞の用例は少ないため、中級教科書に用例を繰り下げ、解説を加えるように提案したい。

また、本稿は、タイ人学習者の会話データを分析し、海外で学ぶ日本語学習者の特徴を考察した。初級レベルを終了した学習者には、留学経験者と留学未経験者がいるが、留学未経験者より経験者の方が、教科書にない助詞「ネ」の多様な機能を用いているが、文法が整理されていないため、助詞「ネ」の誤用も多数犯すということ、また、留学未経験者の助詞「ネ」の使用が限られていることを明らかにした。こうしたタイ人学習者の「ネ」の使用実態からすれば、初級段階から、助詞「ネ」の機能を順に示すとともに、高等教育で用いられる中級教科書では、「ネ」の伝達機能の分類に基づいて助詞「ネ」と共起する例文を整理し、明確な解説が加えられることが望まれるであろう。

本稿で得られた結論は、今後のタイ人学習者に対する助詞「ネ」の指導に有益なものであると考えるが、教科書、会話データともに、今後、さらに数を増やして考察する必要があると考える。また、本稿で考察されたタイ人学習者の雑談は友人同士の設定であったため、文法的な分析が中心となり、人間関係や場などに応じた助詞「ネ」の使用の適切さを考察することができなかった。人間関係や場などに応じた助詞「ネ」の使用条件及びその指導法などについては、今後の課題にしたい。

謝辞

本稿執筆に際し、ご助言をいただいた早稲田大学大学院生の河内彩香氏、伊能裕晃氏に、心より感謝申し上げます。

注

1）本稿では、高等教育の日本語学習を中心としているため、『みんなの日本語』と『あきこと友だち』の他に、日本語を専攻する目的を有しない学生や、社会人が通っている日本語学校で使用されている他の教科書には触れていない。
2）本書の「もう少し」の欄は、追加情報のコラムと見なすことができるため、指導すべきものかどうかは疑問が残る部分もある。
3）本稿の【表 1】の独話資料には、伝達機能が重複している用例 61 例（2.80％）を表示していない。「1. 注視要求」全 1,954 例中、間投助詞が 1,024 例ある。
4）助詞「ネ」の教科書による指導の問題は、遠藤（2008）で取り上げている「～テモイイ」の「初級文型の硬直化」の問題と同様だと考えられる。
5）例［1］、［3］、［11］と共起する助詞「ネ」は、「同意要求」や「確認」とは異なるという解釈もできる。本稿の「伝達機能」の分類によれば、文型［1］は、話し手がただコメントするだけで、賛意の返答を求めていないと解釈すると、文型［1］は「同意要求」と言えない。例（17）の「おくれましたね」は聞き手を否定的に評価しているし、返答を待たずに、原因の情報を要求している。
（17）ナロン「すみません。おそくなりました。」
山川　「今日もおくれましたね。どうしてですか。」　（『あきこと友だち 3』：2）
例［3］に相当する「やりなさいね」などの文は強制の態度が強まるが、「ネ」が共起できるのは、同意を求めるのではなく、行為依頼・命令に認識させようとしているからとも考えられる。

参考文献

伊豆原英子（1992）「『ね』のコミュニケーション機能」『日本語研究と日本語教育』，pp. 159-172，名古屋大学出版会
遠藤直子（2008）「日本語学習者による初級文型～テモイイのとらえ方について―『初級文型の硬直化』の問題から―」『日本語教育』137，pp. 21-30，日本語教育学会
大曽美恵子（1986）「誤用分析 1『今日はいい天気ですね。』『はい、そうです。』」『日本語学』5-9，pp. 91-94，明治書院
ザトラウスキー，ポリー（1993）『日本語の談話の構造分析―勧誘のストラテジーの考察―』くろしお出版
セーントーンスック，プラパー・前田綱紀（2004）「第 2 部　タイ国中等教育用日本語教科書『日本語　あきこと友だち』作成」（発表資料）第 10 回海外日本語教育研究会，国際交流基金，2004 年 11 月 27 日
田窪行則・金水敏（1998）「談話管理理論に基づく「よ」「ね」「よね」の研究」堂下修司他（編）『音声による人間と機械の対話』，pp. 257-271，オーム社
チューシー，アサダーユット（2008）「独話における助詞『ネ』の伝達機能」『日本語文法』8-2，pp. 156-172，くろしお出版
野田春美（2002）「終助詞の機能」宮崎和人他『モダリティ』くろしお出版

資料の出典

庵功雄・中西久実子・山田敏弘・高梨信乃（2000）松岡弘監修『初級を教える人のための日本語文法ハンドブック』スリーエーネットワーク
国際交流基金バンコク日本文化センター（2004）『あきこと友だち』（第1−6巻），Kinokuniya Thailand.
スリーエーネットワーク編（1998）『みんなの日本語』（初級Ⅰ，Ⅱの本冊）
ラウハブラナキット，カノックワン（2002）『ホップ・ステップ・ジャンプ』（第1−2巻），チュラーロンコーン大学

映画シナリオ

安倍照男・井筒和幸（1998）『のど自慢』DVD，ポニーキャニオン
周防正行（1996）『Shall We ダンス？』DVD，角川映画
高畑勲（1991）『おもひでぽろぽろ』DVD，スタジオジブリ
宮崎駿（1995）『耳をすませば』DVD，スタジオジブリ
矢口史靖（2001）『ウォーター・ボーイズ』DVD，東宝